『風と共に去りぬ』を読んで (Gone with the wind)

安部 光壱
Kouichi Abe

１　誰もが一度は読んだことのあるこの１冊をいつかは読んでみたいと思っていました。

読まなかった理由は逆にみんなが読んでいるのに今更という気もありましたし、あのビビアンリーとクラークゲーブルの強烈な個性のグラビアを見ると気が引けていたのかもしれません。

ところが昨年の正月ふとしたことから山崎豊子の「沈まぬ太陽」を読んで、本を読むことで世界旅行をした気になるということを経験し、こういうやりかたで世界旅行するのもまんざらではないと思い始めました。

「沈まぬ太陽」では主人公が日本航空の社員でテヘラン、ナイロビ、カラチと転々と職場を変えさせられるストーリーですが、そのたびに私も中近東やアフリカの原野をさまよった気になりました。

「沈まぬ太陽」で味をしめた私は次は世界中の誰もが読んでいるジャンバルジャンの「ああ無情」（レミゼラブル）を読み始めました。

これは、私がパリに旅行したとき凱旋門に続く大通りにヴィクトルユーゴー通りと言う名前があり、これほどまで親しまれ英雄視されているヴィクトルユーゴーであればきっと面白い物語に違いないと思って読み進みました。

そうしたら面白いこと！ジャンバルジャンの格好いいこと、そしてコゼットの可愛らしいこと。

私もコゼットの様な可愛らしい女の人と巡り合うことが出来たらどんなに心が若返るだろうかと思ったほどでした。

そしてこの小説のもう一つの楽しみはジャンバルジャンの逃亡生活を巡って彼がフランスの各都市に行ったりそこで市長になったり、また、パリの中でコゼットとリュクサンブール公園を散歩したりバスチーユ牢獄付近で反乱をおこしたり、はたまたパリの下水道をさまよったりして日頃見せてもらえないフランスやパリの風景を垣間見ることが出来たことです。これで私は少なくともいっぱしのパリ通になりました。

私は「ああ無情」を読んで正義とか貧困とか愛の意味とか考えさせられました。私にとってはこの本を読むことによって何となく有頂天にもなり幸せな時間をもつことが出来ました。

２　そんなわけで次に何を読もうかと考えましたが、ヨーロッパの次はアメリカだ、そうするとオーガスタがあってニューオリーンズ（ケイジャン料理で有名）の近くにあるアトランタに行こうと言うことになり、はれて「風と共に去りぬ」を読む口実に巡り会ったのです。

しかし読み進めてみると当初ああ無情と同じくらい面白いと思った予測は見事にはずれました。

この小説は男女の恋愛小説では全くなく実は歴史小説だったのです。
日本には南北戦争に匹敵するほどの大戦争は昔はなかったと思います。
黒人に対する差別や偏見が生活の隅々まで行き渡っていると人間はどういう考えを持つようになるかというのも感じました。

それを巡って戦争までしなければいけないものなのか。
時あたかもアメリカのイラク攻撃が予兆される時期だった（平成 15 年 1 月から 3 月）だけにアメリカの紛争を解決する手段としての武力好き（誤解を招く表現かもしれませんが）が伝統的なものなのではないだろうかと考えたことでした。

南北戦争について言えば我々日本人はリンカーン大統領とかアンクルトムの小屋とか奴隷解放とかいう断片的な事実しか知りませんが、この戦争はアメリカを大きく変えたというか今のアメリカを作ったと言ってもいいと思います。

それは大きな犠牲を払った。そしてまた、ニューヨークやLAやシカゴと言った大都会を作った過程を知る上でも陪審制やOJシンプソン事件を知る上でも計り知れないインパクトをもった歴史的事件だと思います。

「風と共に去りぬ」はこの南北戦争という歴史的事件を大きな縦の流れとしてその中で生きてきた人々を描写しています。
その中での主役は、勿論スカーレットオハラです。
そしてこの主人公は時として南北戦争をも圧倒するほどの個性を発揮しています。
では、その理由は何なのか。
その魅力は何なのかを今から考えてみたいと思います。

３　作者のマーガレットミチェルは、このスカーレットオハラの個性の源泉を小憎らしいことに私の大好きなアイルランドに求めています。

スカーレットの父ジェラルドはアイルランドからの移民でずんぐりした男ではあるが体力と才気、賭気（なんと読むか知りませんが私の造語）があって一代で財をなした人物です。

アイルランド人は、司馬遼太郎に言わせると百戦百敗の国ではあるが、それでもなお自分の国は世界の中心だと考えている国です。

アイルランドは疫病と貧困とイギリスからの永い圧制で全く踏んだり蹴ったりの国ですが、バーナードショーやイェーツなどノーベル文学賞を３人も輩出した国でもあります。
ダブリン郊外をドライブすると白雪姫に登場する７人の小人ならぬレプラコーンがひょっこり現れてきそうな森林に出くわします。

この厳しい現実と神秘的な土壌が文学的資質を育んだのかも知れませんが、この小説の舞台になったアトランタのタラの丘もアイルランドのゆかりの地名です。しかし何よりスカーレットの個性もこのアイルランド魂の一変形に思えてなりません。

「風と共に去りぬ」の最後の巻の所にこう言う下りがあります。「たとえ敗北に直面しようとも敗北を認めない祖先の血を受け継いだ…」と。私は、これだ！とうなずかずにはおれませんでした。

４　このような不屈の魂をもったスカーレットを実はマーガレットミチェルは美人で馬鹿で、誰からも好かれたい、好かれるはずだという高慢ちきな女として描いています。

女の狡さやわがままさを平気で（？）容赦なく書いています。
私も女は馬鹿でうそつきで自分の事しか考えないと思っていますが、マーガレットもあからさまにこの点を描いてスカーレットを通常のヒロインにしてくれません。

私にとってはウエストが 17 インチだろうが 18 インチだろうがそんなに女の魅力に関係あることだろうかとか、人の恋人を好きでもないのに横取りしなくてもいいではないかとか、自分の生んだ子ぐらい可愛いはずではないかとか、このスカーレットの自分勝手さに辟易するところが多々ありました。
それでどうしてこの小説が不朽の名作なのか、多くの女性を魅了しているのかさっぱりわかりませんでした。

４巻まではそういうわけで読むスピードが遅々として進まずなにやらノー天気な南部の青年たちが英雄気取りで戦場に行き死亡し、疫病にかかり負傷して帰ってくる。

それでも残った人たちは南部が勝利すると確信している（どこかの国でこれと同じような現象があったような・・）。
南北戦争が終わったあとの北軍のおぞましい略奪行為と本当は黒人に対する無理解と差別の温存。こんな風に読んでいくと何がこの小説は言いたいのかよくわからないいまま最終の巻まで読み進みました。

５　最後の５巻めは、レットパトラーとスカーレットはめでたく結婚するが、その間に生まれた子ボニーが子馬に乗って垣根を越えようとして落馬して死んでしまいます。
レットはその子の死亡に悲しみ、とうとうスカーレットの元を去ってしまいます。
あれだけ野卑で女たらしでしかもスカーレットを溺愛したレットはポニーが生まれたとたん子煩悩に変貌して、それはスカーレットでさえも焼き餅を焼くほどでした。

しかしその心の裏側には、どうしても手に入れることが出来なかったスカーレットをボニーが生まれることによって、それをスカーレットの分身として片時も離さないレットのスカーレットに対する愛情の裏返しだったと言うことがわかるのです。

そのことがあからさまになった時、スカーレットは自分を本当に愛してくれたのは誰だったのか。

アシュレではなく陰に陽にスカーレットの目の前に現れては消えていったレットだったと悟ります。アシュレはメラニーがいるから自分を愛したのか。

いろんな思いがスカーレットの中に入り込んでいわば真実があからさまになるのです。

このとき、確かにスカーレットは初めて自分をさげすんだとおもいます。
しかし私には、この最後のストーリーあたりからレットやアシュレの男群からメラニーやスカーレットの存在感が確実に増してきたように感じ始めました。そして結末はどうなったでしょう。作者は悔恨の情で最後を終わらせませんでした。「今、考えるのはよそう。」「そうだ明日タラに行って考えよう」「みんな明日タラに行って考えよう。そうすれば何とかたえられるだろう。」何というサバイバル魂でしょうか。

英語では、Tomorrow is another day. と書いてありました。
今流に言えば「明日があるさ」と言うことになるでしょう。
たとえ敗北に直面しようとも敗北を認めないアイルランド魂、この不屈のサバイバル魂があなたにはありますか、と言うことをこの小説はとうているのです。

要は、この小説は、人間はどうやって生きるのかという事を教えています。
南北戦争という未曾有の価値観の転換期において人間はどうやって生きるかという問題です。アシュレの様に理想を追い求めるのか、矛盾を感じながら生きていくのか。それとも現実に立ち向かってそれに闘って終止符を打とうとするのか。

どちらが勇気ある生き方か。
私にはそれを教えてくれる小説に思えてなりません。
読み終わったあとの素晴らしい充実感と迫力、時代と場所を越えてまた男女の別なく、年齢差を超越して読み継がれている魅力がここにあると思いました。

願わくば、アシュレもレットもそしてメラニーも元気になってスカーレット共々一緒に食事でもしたいと考えています。

思えばレミゼラブルのジャンバルジャンとコゼットは好きですが一緒に食事をしょうとは思いません。

ジャンバルジャンはストイックで口数が少なそうだし、コゼットはマリウスに夢中だし、それに比べてスカーレットやその友達群はよくしゃべり同時代を生き抜いた人たちで食欲も旺盛そうだから・・・

最後までこの駄文を読んでくださった人たちに感謝します。